葬送儀礼の現状を考える ⑥

エンディング産業展レポート

――多様化する葬儀・エンディング

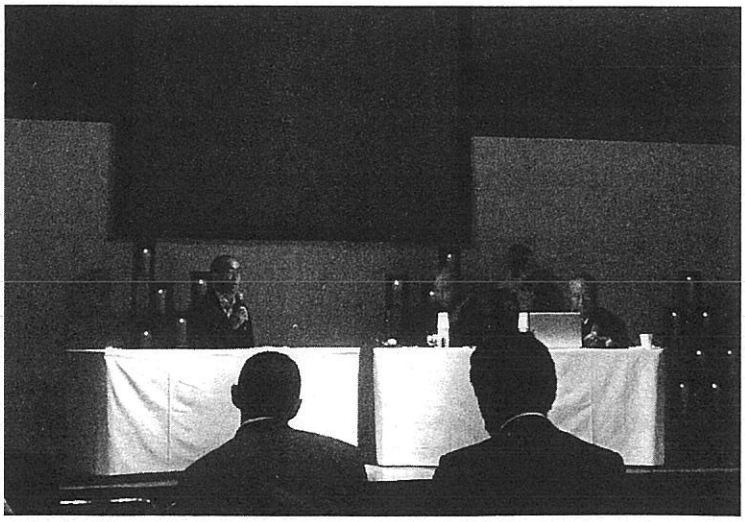
浄土真宗本願寺派　総合研究所

■はじめに

「葬儀」から「エンディング」へ――「終活」や「エンディング」という言葉が、社会的な認知を得て久しい感があります。このことは、従来であれば「葬儀」という比較的狭い枠組みで語られていた事柄が、近年は「人生の締めくくり」という広い視点で考えられるようになったことを示している、と考えてよいでしょう。

また同時に、そのような状況下で新たに発刊された一般向けの専門誌を一読するだけでも、「エンディング」を取り巻く業界が、いかに成長著しい分野であるかが窺われます。十数年来の成長を続けるこの業界ですが、つい最近（二〇一五年末）も、インターネット通信販売での「お坊さん便」が物議を醸すなど、その成長や状況の変化は、まだまだ続きそうな感じです。

そのような状況のなか、二〇一五（平成二七）年一二月八日～一〇日の三日間にわたって、「エンディング産業展２０１５（ＥＮＤＥＸ）」（於・東京ビックサイト）が開催されました。来場者も約二二、〇〇〇人（主催者発表）と、エンディング業界が、今日いかに社会から注目されているかが窺われます。



葬送儀礼の将来についての僧侶によるパネルディスカッション

ＥＮＤＥＸ会場入口

一、エンディング産業展開催の背景
～多様化するエンディング産業と情報の交錯

この数年間におけるエンディング産業の著しい成長の背景は、単に高齢化社会の到来による葬儀件数の増大だけではありません。葬儀だけをとっても、生花祭壇を中心とする葬儀の登場、そしてエンディング全体で見ると、いわゆるエンディング・ノートへの記入をはじめとする終活ブームの興隆など、人生の「エンディング」に関し、さまざまな業種の参入と多様な商品の開発が確認されます。このようなエンディング産業の成長は、私たちに多様な選択肢を与えてくれます。そしてそれらの商品が、社会のニーズに合った結果、つまり需要と供給のバランスのうえに、エンディング産業の成長があると思われます。

しかし成長期にある業界では、異業種の参入や新たな商品の開発のなかで、多種多様な情報が交錯（こうさく）し、ともすれば情報過多の状態（加えて玉石混淆（ぎょくせきこんこう）でもある）となりがちです。浄土真宗本願寺派総合研究所における聞き取り調査などでも、あまりにも情報が多く、しかも分散しているので状況が分かりづらい、という声をしばしば聞くことがあります。今回の産業展の開催には、そうした玉石混淆の情報を「集約し発信する」ことが目的の一つとされていました（主催者談）。

二、エンディング業界の傾向から読む僧侶へのまなざし

今回のエンディング産業展は、葬祭設備にはじまり、花、墓苑・石材、ペット葬、葬儀業務支援（アウトソーシング）など、実に多くの業種がエンディング産業に関わっていることを実感できるものでした（出展自体が二〇〇以上）。同産業展で確認できた商品の多くは、各種メディア等を通して比較的認知の広まっているものでしたが、それらを通して感じた注目すべき傾向についてご紹介しておき

ましょう。

昨今「葬儀にはお金をかけない」傾向にあると言われており、葬儀一件あたりの費用は少なくなっています（一般財団法人消費者協会『第十回「葬儀についてのアンケート調査」報告書』などを参照）。しかし同産業展では、納棺用の衣装（ドレスなど）のような故人を手厚く送るための商品や、故人の思い出（写真等）をさまざまな形で残し、共有するための商品が新たなものとして注目を集めていました。出展者に聞くと、いずれも顧客からは好評を得ており、更なる商品開発を考えている、とのことで、葬儀やエンディングに関わる全てが経費削減の一辺倒でないことが確認できました。

これまでお布施や葬儀社への費用など、葬儀そのものに関しては、しばしば「不透明」と表現されてきたような場面では、確かに金額の減少が見られます。しかし、エンディング全体のなかで、「故人のために」や「故人を大切に」という部分では、むしろ金額が増大している部分も少なくないようです。言い換えれば、葬儀そのものが全体として否定的に捉えられているわけではなく、葬儀を構成する諸要素のなかでも、儀礼執行者たる僧侶とその営みに価値が見出されていないことを物語っているのではないでしょうか。

三、エンディング業界が抱く危機感〜簡素化・人口減少・多様化

二〇一五年末、インターネット通販会社がインターネットによる僧侶派遣の注文の取り扱いを始める、と報道がありました。こうしたエンディング業界への異業種の参入により、多様化の激しさは増しています。こうした状況はどのように受け止められているのでしょうか。さまざまな職種の方々とお話しするなかで、二つの「危機感」が抱かれていることが確認できました。

第一に、縮小化に対する危機感です。総務省のホームページに、「二〇六〇年（平成七二年）には八、六七四万人になるものと見込まれている」と記載されているように、人口減少・少子高齢化が急進する日本において、一つ一つの業種が多様化すればするほど規模縮小は避けられない問題となります。そのため、ENDEXでは業者間の連携が強く意識され、出展ブースでは、積極的な交流が見られました。こうした状況は、経済的な側面が主であって、僧侶や寺院には関わりがないようにも考えられます。しかし、この危機感は、葬儀業者の方々に反省を促す側面があり、これが第二の危機感に関わっています。

第二の危機感は、エンディング業界に関わる人々の意識が変わらないならば、このまま葬送儀礼は多様化・縮小化の一途をたどり、最終的に葬儀は廃れてしまうのではないか、というものです。葬儀を取り巻く現状を見ると、私たちは葬儀業者の方々が経済性を優先し、地域や伝

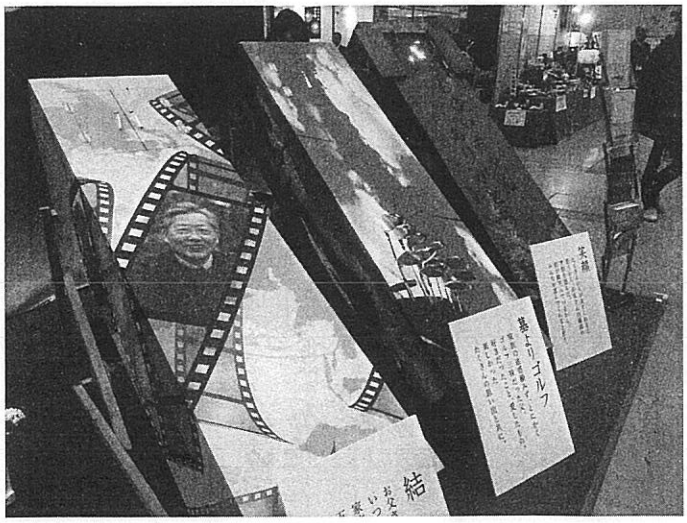
統を無視したことで、簡素化や多様化が推し進められたと考えてしまうことがあります。しかしながら、国立歴史民俗博物館の山田慎也先生が「必ずしも葬祭業者は伝統的な民俗を否定するわけではない」（「告別式の展開と葬儀の変容」『信仰と儀礼の歴史学』二〇一二）と指摘されていたように、葬儀業者の方々は、経済面だけから葬送儀礼を考えているわけではないのです。「葬儀の意味をきちんと伝えていたか」「無理にやらせる葬儀、しなければいけない葬儀を提供していなかったか」「悲しむ方々に寄り添って仕事をしていたか」。葬儀の縮小化、多様化、葬送儀礼の軽視といった現状を引き起こした原因は自分たちではないか、と反省され、自分たち自身が変わらなければならないという意識を持たれている態度には、私たちも学ぶべき点があるように考えられます。

四、経済活動としての葬儀

現代社会では、葬儀が「経済」という枠組みのなかで考えられることは避けられませんし、僧侶や寺院が経済的側面と無関係に存在することも不可能です。経済活動を中心として葬儀に携わっている葬儀業者の方々のお話から気になる点を挙げたいと思います。

第一に、「人材確保と人材育成」の重要性です。人口減少・少子高齢化は、生産年齢人口、いわゆる「働きての主力」とされる十五～六四歳の人口の減少をもたらしています。そうした現状のなかで、現代社会の変化の速度、消費者の意識の変化に対応していくためには、人材を確保・育成していくことは不可欠な要素であると指摘されました。また、あくまで一人一人への対応をいかにするかが大事で、業務的な仕事に終始してはいけない、という言葉は、多くの方からお聞きしました。

第二に、インターネットが発達した現代社会では、「一般の方々が比較し、選ぶことが当然である」という認識です。しかも、一般の方々のほうが葬儀業者よりも、サービス内容や予算などについて多くのことを知っていることもよくあるようです。一般の方が「選び」、葬儀業者や僧侶が「選ばれる」という関係性がすでに生じてしまっている、ということは忘れてはならない視点だと考えられま



業界のトレンド① 思い出をプリントした棺

す。

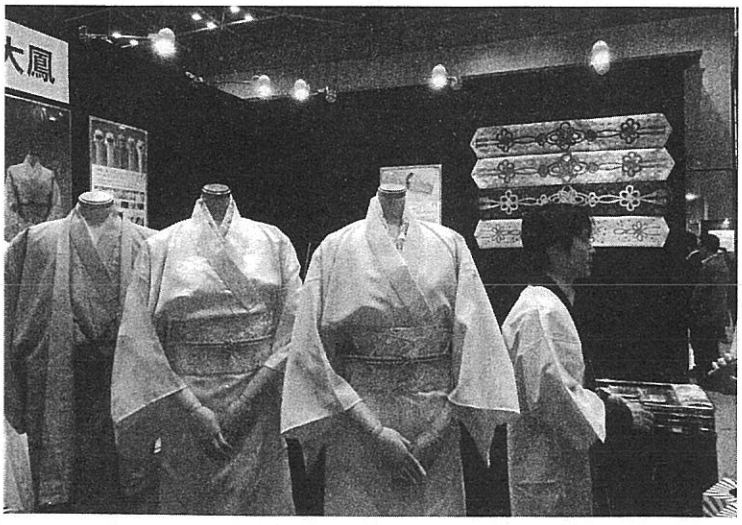
第三に、「葬儀」の前後、生前と死後へのサービスの拡張を行っていくということです。現在では、ご自身の葬儀について悩(なや)んでいる方が多いこと、ご遺族による要望が多様にあること、を背景に、保険、墓、仏壇、相続、供養(くよう)など、あらゆる事柄をセットで提供することが当然だとお聞きしました。

五、おわりに～僧侶・寺院の役割と可能性

葬儀業者の方々とお話しするなかで、僧侶・寺院に対する期待や不満をお聞きしました。例えば、葬儀業者の方々はそれぞれの意味づけは異なるでしょうが、「葬儀の意味・役割」を伝え、ご遺族に寄り添って葬儀が執行されるように努力されています。しかしながら、葬儀業者の方々自身がそうした行為に限界を感じていることも事実のようです。つまり、「葬儀の意味・役割」は僧侶からしっかり伝えていただきたい。そのうえで、ご遺族、僧侶、葬儀業者が一体となって葬儀を執行したいと考えている、とお聞きしました。

僧侶にとっては、ご遺族が葬儀業者と相談したうえでの要望や、インターネットで調べたうえでの要望（例えば、宇宙葬、散骨、メモリアルＤＶＤなど）がどの程度受け入れられるのか、判断基準をどのようにしたらいいか、などの問題も生じてくると考えられます。その際、現代社会では「伝統的に、昔からこうだから」というだけでは満足されない側面があるようです。会場で行われたシンポジウムでも、お布施の金額明示問題などを例に、僧侶や仏教界は「そもそもこうあるべきもの」という本質論にとどまっており、現場への対応力に欠けている、という指摘がありました。「選ぶことが当然である社会」に変化してきたことで、その「選び」を共にできるような対話の場とその具体化の必要性は高まっています。

ここで一度、なぜ葬儀業者の方々は僧侶や寺院に期待を持つのかを考えたいと思います。葬儀業者の方々は、自分自身の「強み・弱み」を見つめ直し、認識していなければ、人々の考え方や行動が多様化した現代社会では、具体的に行動していくことができない、と指摘されてい



業界のトレンド② 納棺用衣装

ました。では、僧侶や寺院の強みは何なのかと考えると、例えば、僧侶は葬送儀礼の執行者であること、通夜・葬儀・法事という継続的な関わりを持てること、利便性や経済性の側面が強い会館とは異なり、寺院は宗教的空間であること、などが挙げられると思います。弱みは、そうした強みを、現代社会の変化に即応した形で出しにくくなっていることと言えるのではないでしょうか。

業界のトレンド③ 生花による荘厳

ＥＮＤＥＸに参加し、葬儀業者の方々とお話しするなかで、僧侶や寺院の役割・可能性を誰も否定していない、もっと言えば、今こそ必要とされているのではないかと感じることができました。今後は僧侶・門信徒・葬儀業者の関わりのなかで葬送儀礼が執行されることが求められていることを再認識することができました。

（総合研究所　福本康之・岡崎秀麿）

掲載写真はすべて主催者より提供・許諾をいただいています。